

YB709

第二級海上無線通信士「無線工学B」試験問題

25問 2時間30分

A - 次の記述は、受信アンテナにおける実効面積について述べたものである。このうち誤っているものを下の番号から選べ。

- 1 アンテナから取り出しうる最大電力が、断面積 A_e [m²] 内に運ばれている到来電波の電力に等しいとき、 A_e をアンテナの実効面積という。
- 2 実効面積は、アンテナの利得に比例する。
- 3 実効面積は、波長の 2 乗に比例する。
- 4 開口面アンテナの実効面積は、開口面積と利得係数の比で求められる。

A - 自由空間を伝搬する平面波の電波を、半波長ダイポールアンテナと相対利得が 2.5 (真数) のアンテナを交互に取り替えて受信したとき、相対利得が 2.5 のアンテナの受信有能電力が 5 [mW] であった。このときの半波長ダイポールアンテナの受信電力の値として、正しいものを下の番号から選べ。

- 1 0.3 [mW]
- 2 0.5 [mW]
- 3 2.0 [mW]
- 4 4.5 [mW]

A - 次の記述は、自由空間において、送信アンテナから十分遠方にある点の電波の電界強度について述べたものである。 内に入れるべき字句の正しい組合せを下の番号から選べ。

- (1) 送信電力と A の積の平方根に比例し、距離に反比例する。
- (2) 相対利得 (真数) の B に比例する。
- (3) アンテナの C に比例する。

	A	B	C
1	メータアンペア	2 乗	実効長
2	メータアンペア	平方根	実効面積
3	アンテナ効率	2 乗	実効面積
4	アンテナ効率	平方根	実効長

A - 次の記述は、アンテナの利得について述べたものである。このうち誤っているものを下の番号から選べ。

- 1 相対利得は、基準アンテナとして完全半波長ダイポールアンテナを使用したものである。
- 2 マイクロ波のアンテナの利得は、一般に基準アンテナとしてホーンアンテナを用いている。
- 3 無損失のアンテナの絶対利得は、指向性利得と等しい。
- 4 半波長ダイポールアンテナの絶対利得は、約 0.8 (真数) である。

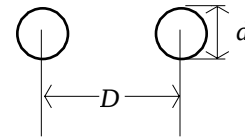
A - 無損失給電線の入力インピーダンスが、出力端を短絡したときは 10 [Ω]、開放したときは 90 [Ω] であった。この給電線の実効インピーダンスの値として、最も近いものを下の番号から選べ。

- 1 30 [Ω]
- 2 50 [Ω]
- 3 60 [Ω]
- 4 80 [Ω]

A - 6次の記述は、図に示す平行二線式給電線について述べたものである。□内に入れるべき字句の正しい組合せを下の番号から選べ。

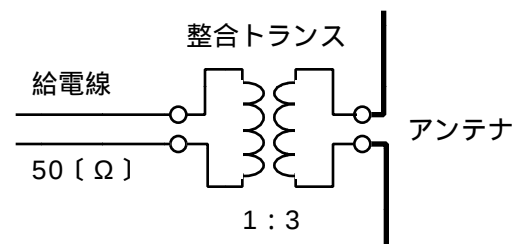
- (1) 特性インピーダンスの大きさは、一般に同軸給電線に比べて □ A □、間隔 D [m] が大きくなるほど、直径 d [mm] が □ □ なるほど、大きくなる。
 (2) 減衰定数は、 d を □ □ するほど小さくなる。

	A	B	C
1	大きく	大きく	小さく
2	大きく	小さく	大きく
3	小さく	大きく	大きく
4	小さく	小さく	小さく



A - 図に示す整合トランスの巻線比が 1 : 3 であるとき、特性インピーダンスが 50 [Ω] の給電線と整合するアンテナ入力インピーダンスの値として、正しいものを下の番号から選べ。

- 1 150 [Ω]
 2 270 [Ω]
 3 450 [Ω]
 4 600 [Ω]



A - 8次の記述は、折返しダイポールアンテナと半波長ダイポールアンテナの相違点について述べたものである。□内に入れるべき字句の正しい組合せを下の番号から選べ。

- (1) 図 1 に示す 2 線式折返しダイポールアンテナの放射抵抗は、半波長ダイポールアンテナの放射抵抗の約 □ A □ 倍である。
 (2) 図 2 に示す 3 線式折返しダイポールアンテナの放射抵抗は、半波長ダイポールアンテナの放射抵抗の約 □ B □ 倍である。
 (3) 折返しダイポールアンテナは、半波長ダイポールアンテナに比べて周波数特性が □ □ で、利得は □ D □ 。

	A	B	C	D
1	2	3	広帯域	大きくなる
2	2	6	狭帯域	ほとんど変わらない
3	4	9	広帯域	ほとんど変わらない
4	4	9	狭帯域	大きくなる

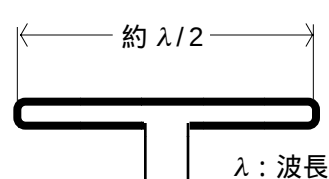


図 1

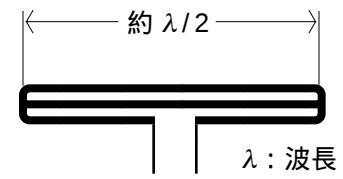
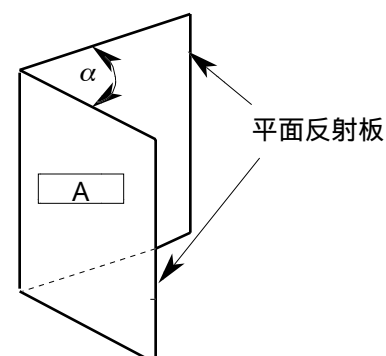


図 2

A - 9次の記述は、図に示すコーナレフレクタアンテナについて述べたものである。□内に入れるべき字句の正しい組合せを下の番号から選べ。ただし、□内の同じ記号は、同じ字句を示す。

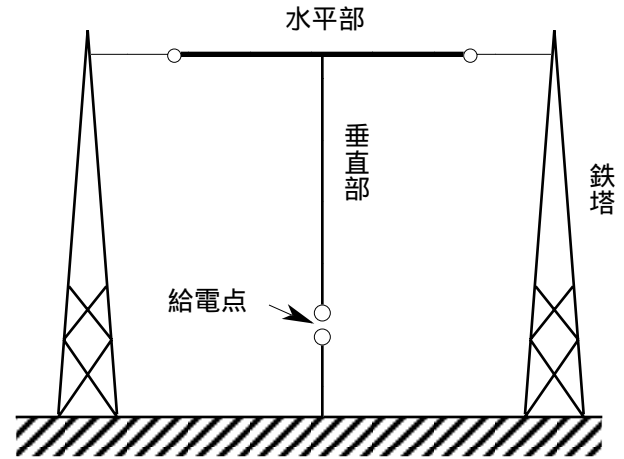
- (1) 導体でできた平面反射板を中央で二つに折り曲げて、その内側に □ A □ などの放射器を置いた構造である。
 (2) 反射板の前方へ放射される電波は、折り曲げ角度 α が 90 度のとき、影像効果による電波と放射器から直接放射される電波との計 □ B □ 本の電波の合成となる。
 α を変えるときアンテナの放射 □ C □ が変わる。

	A	B	C
1	半波長ダイポールアンテナ	3	周波数
2	半波長ダイポールアンテナ	4	パターン
3	スリブアンテナ	4	周波数
4	スリブアンテナ	3	パターン



A - 10 次の記述は、図に示す T 形アンテナについて述べたものである。□ 内に入れるべき字句の正しい組合せを下の番号から選べ。

- (1) 1 本又は複数の導線を平行にして水平に張り、その中央から導線を垂直に引き下ろした接地アンテナであり、主に □ A □ 帯で用いられる。
- (2) 水平部は垂直接地アンテナの上端に □ B □ を負荷したのと考えることができる。
- (3) 同一条件で用いるとき、アンテナの高さは、 $1/4$ 波長垂直接地アンテナより □ C □ なる。



	A	B	C
1	超短波 (VHF)	静電容量	低く
2	超短波 (VHF)	インダクタンス	高く
3	中波 (MF)	インダクタンス	高く
4	中波 (MF)	静電容量	低く

A - 11 次の記述は、短波通信の回線を運用するとき用いられる最高使用可能周波数 (MUF)、最低使用可能周波数 (LUF) 及び最適使用周波数 (FOT) について述べたものである。□ 内に入れるべき字句の正しい組合せを下の番号から選べ。

- (1) MUFとLUFは、日変化、季節変化及び年変化が □ A □ 。
- (2) LUFは、電離層あらし (磁気あらし) が発生すると □ B □ なる。
- (3) 通常MUFの □ C □ [%] の周波数をFOTといい、MUFに比べて減衰も少なく、電離層を突き抜ける可能性も少ないので実際の通信に多く用いられる。

	A	B	C
1	ある	高く	85
2	ある	低く	75
3	無い	低く	85
4	無い	高く	75

A - 12 相対利得が 10 [dB] のアンテナから放射電力 40 [W] で電波を放射したとき、最大放射方向で 20 [km] 離れた点における自由空間電界強度の値として、最も近いものを下の番号から選べ。

- 1 3.5 [mV/m]
- 2 7.0 [mV/m]
- 3 8.5 [mV/m]
- 4 9.0 [mV/m]

A - 13 次の記述は、M 曲線とマイクロ波の伝搬について述べたものである。□ 内に入れるべき字句の正しい組合せを下の番号から選べ。

- (1) 図 1 は、大気屈折率が高さととも徐々に □ A □ していくときの M 曲線であり、ラジオダクトを形成 □ B □ 。
- (2) 図 2 は、大気中に温度などの □ C □ が生じたときの M 曲線である。

	A	B	C
1	減少	しない	逆転層
2	減少	する	平面層
3	増加	しない	逆転層
4	増加	する	平面層

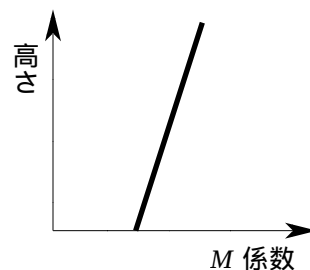


図 1

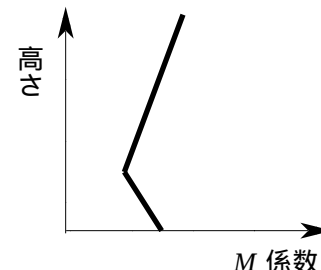


図 2

A - 14 次の記述は、図に示す構成による抵抗変化法による接地アンテナの実効抵抗 R_e 〔 Ω 〕の測定について述べたものである。

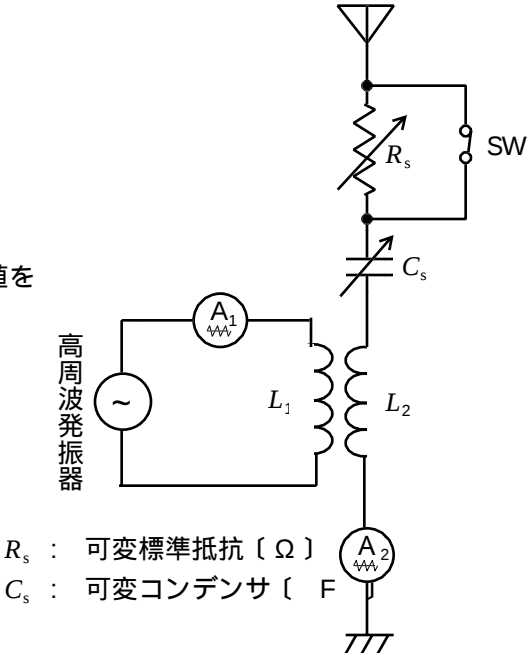
□ 内に入れるべき字句の正しい組合せを下の番号から選べ。ただし、高周波電流計 A_1 、 A_2 の内部抵抗及び接地抵抗は無視できるものとする。

- (1) スイッチSWの開閉によらず、 A_1 の指示値が変化しないように、結合コイル L_1 、 L_2 〔H〕は □ A □ に結合しておく。
- (2) SW を閉じて、高周波発振器を測定周波数で動作させる。次に A_2 を調整して同調をとったときの A_2 の指示値を I_1 〔A〕とする。
- (3) 回路をそのままの状態にして SW を開き、そのとき A_2 の指示値を I_2 〔A〕とすれば、次式が成り立つ。

$R_e I_1 = \square B \square \text{〔V〕} \cdots \cdots$

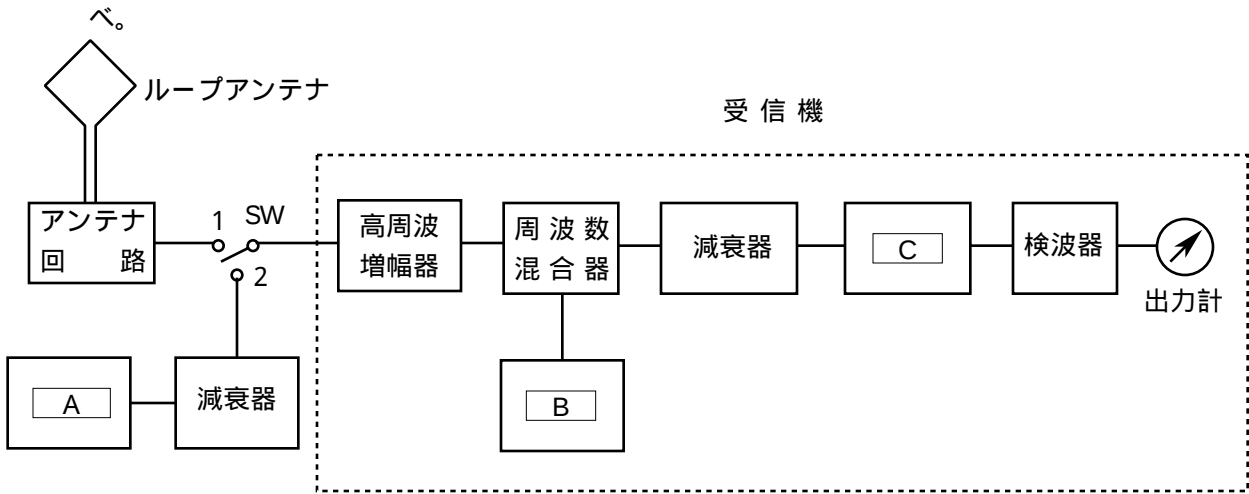
式より $R_e = \square C \square \text{〔}\Omega\text{〕}$ として求められる。

	A	B	C
1	疎	$R_s I_2$	$\frac{R_s I_2}{I_1}$
2	疎	$(R_s + R_e) I_2$	$\frac{R_s I_2}{I_1 - I_2}$
3	密	$R_s I_2$	$\frac{R_s I_2}{I_1 - I_2}$
4	密	$(R_s + R_e) I_2$	$\frac{R_s I_2}{I_1}$



R_s : 可変標準抵抗〔 Ω 〕
 C_s : 可変コンデンサ〔F〕

A - 15 次の図は、短波電界強度測定器の構成例を示したものである。□ 内に入れるべき字句の正しい組合せを下の番号から選べ。



	A	B	C
1	比較発振器	局部発振器	中間周波増幅器
2	比較発振器	校正用水晶発振器	低周波増幅器
3	振幅制限器	局部発振器	低周波増幅器
4	振幅制限器	校正用水晶発振器	中間周波増幅器

A - 16 次の記述は、アンテナ系の測定の種類と測定方法について述べたものである。このうち誤っているものを下の番号から選べ。

- 1 アンテナ利得の測定では供試アンテナを送信アンテナとするか、又は受信アンテナにするかの二つの方法があるが、測定条件を同じにすると、ほぼ同様な測定結果が得られる。
- 2 マイクロ波のアンテナ利得は、反射板を用いて供試アンテナ一つで測定することができるが、正確な測定は難しい。
- 3 接地抵抗の測定では、大地の成極作用（一定の直流電圧を加えたとき時間とともに電流が変化する現象）のために生ずる誤差を防ぐため、直流ブリッジなどの測定器を用いる方法がある。
- 4 給電回路の定在波の測定では、定在波測定器による方法や方向性結合器を用いて給電回路上の進行波と反射波を測定し、その値を用いて計算で求める方法などがある。

A - 17 自由空間において、等方性アンテナから 30 [W] の放射電力で電波を放射したと仮定したとき、このアンテナから 10 [km] 離れた点における電界強度の値として、正しいものを下の番号から選べ。

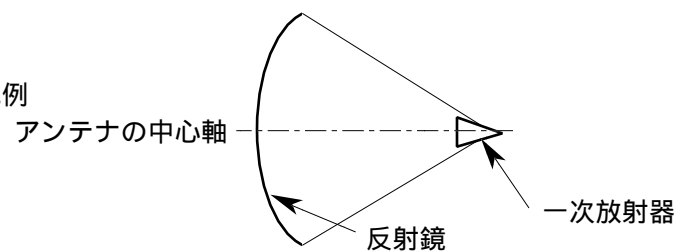
- 1 3.0 [mV/m]
- 2 3.5 [mV/m]
- 3 4.0 [mV/m]
- 4 5.5 [mV/m]

A - 18 無損失線路に定在波が生じないための純抵抗負荷の値として、最も近いものを下の番号から選べ。ただし、線路の単位長さ当たりのインダクタンス L 及び静電容量 C を、それぞれ $0.1 \mu\text{H/m}$ 及び 20 pF/m とする。

- 1 0 [Ω]
- 2 120 [Ω]
- 3 15Ω
- 4 1,800 [Ω]

A - 19 次の記述は、図に示すパラボラアンテナについて述べたものである。このうち誤っているものを下の番号から選べ。

- 1 一次放射器から放射された球面波を、放物面反射鏡で反射することによって平面波に変換する。
- 2 アンテナの利得は、開口面の直径の 2 乗に比例し、波長に反比例する。
- 3 レーダー、固定通信及び衛星通信などの主にマイクロ波やミリ波の周波数帯で広く用いられている。
- 4 指向性は、最大放射方向が放物面反射鏡の回転軸に一致し、開口方向に向く単方向性である。



A - 20 送信アンテナの地上高を 100 [m]、受信アンテナの地上高を 25 [m] としたとき、電波の見通し距離の値として、最も近いものを下の番号から選べ。ただし、大気は標準大気とする。

- 1 47 [km]
- 2 54 [km]
- 3 62 [km]
- 4 78 [km]

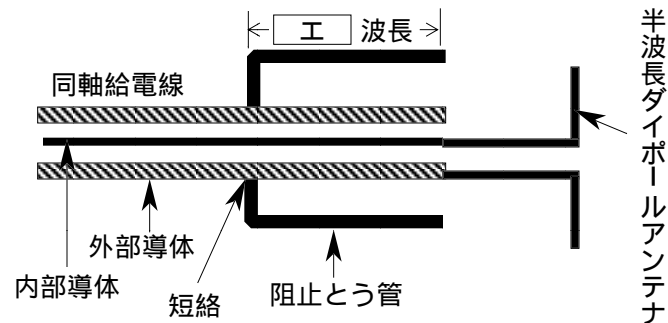
B - 次の記述は、微小電気双極子を正弦波振動電流で励振したときに発生する電磁界について述べたものである。□ 内に入れるべき字句を下の番号から選べ。

- (1) 距離の 3 乗に反比例する成分を□ という。
- (2) 距離の 2 乗に反比例する成分の全てを総称して□ といい、このうちの磁界は□ の法則により導かれるものに相当する。
- (3) 距離に反比例する成分の全てを総称して□ といい、3 種類の電磁界の中で最も遠くまで到達することができ、これが電磁波となり、□ 波として伝搬する。

- | | | | | |
|---------|---------|----------|--------|-------|
| 1 放射磁界 | 2 誘導電磁界 | 3 球面 | 4 レンツ | 5 静電界 |
| 6 放射電磁界 | 7 静磁界 | 8 ビオ・サバル | 9 誘導電界 | 10 平面 |

B - 次の記述は、半波長ダイポールアンテナと同軸給電線の整合について述べたものである。□内に入れるべき字句を下の番号から選べ。ただし、□内の同じ記号は、同じ字句を示す。

- (1) 半波長ダイポールアンテナを同軸給電線を用いて直接給電すると、同軸給電線の外部導体の外側表面に □ア が流れる。このため左右のダイポールに流れる電流が □イ となったり、同軸給電線の外側表面から電波が放射され、アンテナの指向性に悪影響を与える。
- (2) □ア を阻止するための一つとして、図に示す □ウ と呼ばれる阻止とう管を用いる方法がある。長さが □エ 波長の阻止とう管を同軸給電線の外側にかぶせて給電点側を開放、他端を外部導体に短絡する。このとき、給電点から同軸給電線側を見たインピーダンスは □オ に近くなり、□ア を阻止することができる。



- | | | | | | | | | | |
|---|---------|---|------|---|-----|---|-----|----|------|
| 1 | U字バラン | 2 | 対称 | 3 | 零 | 4 | 1/4 | 5 | 漏れ電流 |
| 6 | シュペルトップ | 7 | うず電流 | 8 | 無限大 | 9 | 1/2 | 10 | 非対称 |

B - 次の記述は、電波が伝搬するときの性質について述べたものである。このうち正しいものを 1、誤っているものを 2 として解答せよ。

- ア 電波は、異なる媒質の境界で反射したり、屈折したりする。
- イ 電波は、ナイフエッジ状の山岳があると透過して陰に入り込む。
- ウ 位相の異なった電波が合成されると、干渉を起こして互いに強め合ったり弱め合ったりする。
- エ 電波の電力密度は、自由空間中では、距離に反比例して減少する。
- オ 電波の降雨による減衰は、周波数が 1〔GHz〕以下で顕著になる。

B - 4 次の記述は、マイクロ波アンテナの利得を比較法により屋外で測定する方法及びその注意事項について述べたものである。□内に入れるべき字句を下の番号から選べ。

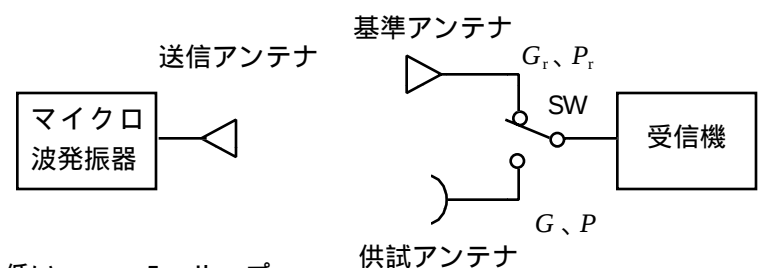
(送受信アンテナ間には遮へい物が無く、周囲に電波を反射する物が無い開けた場所を選ぶ。大地反射波があるときは、その影響を少なくするようにアンテナをなるべく □ア 場所に設置するか、反射点に □イ などの反射防止板を設ける。

送受信アンテナ間の距離は、波長に比べてアンテナの開口径が □ウ なるほど、大きくする必要がある。

図に示す構成により、送信アンテナから一定周波数で一定電力の電波を送信し、これを切替スイッチ SW で基準アンテナ又は供試アンテナに切替えて受信し、それぞれの受信電力を測定する。一般に基準アンテナには、□エ アンテナを用いる。

利得が G_r 〔dB〕の基準アンテナで受信した受信電力が P_r 〔dBm〕であり、供試アンテナで受信した受信電力が P 〔dBm〕であるとき、供試アンテナの利得は、次式で求められる。

$$G = \square \text{オ} \text{〔dB〕}$$



- | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|-----------------|---|-----|---|-----|----|-----|
| 1 | アクリル板 | 2 | $P - P_r + G_r$ | 3 | 大きく | 4 | 低い | 5 | ループ |
| 6 | 金属板 | 7 | $P + P_r + G_r$ | 8 | 小さく | 9 | ホーン | 10 | 高い |

B - 次の記述は、電磁ホーンについて述べたものである。□内に入れるべき字句を下の番号から選べ。

- (1) 導波管の先端を徐々に広げて、開口 □ア を大きくした構造を持つ。
方形導波管(の)先端を広げたものとして扇形ホーンや □イ ホーンがあり、円形導波管の先端を広げたものが □ウ ホーンである。
- (3) 電磁ホーンの開口面から放射される電波は 、電磁ホーンの近傍では □エ である。
電磁ホーン(の)開口面積又は長さを変えることによって利得は □オ 。

- | | | | | |
|-------|---------|-------|------|--------|
| 1 円すい | 2 変わらない | 3 面積 | 4 方形 | 5 平面波 |
| 6 体積 | 7 角すい | 8 変わる | 9 円筒 | 10 球面波 |